

各関係機関長 様

熊本県病害虫防除所長

施設野菜における病害虫防除対策（技術情報第9号）について（送付）
このことについて、下記のとおり取りまとめましたので、防除指導の参考としてご活用下さい。

記

今年は、施設栽培の野菜類において、平年に比べ早い時期から発生が多い病害虫がみられます。今後は、農薬の散布むらが発生しやすい時期となり、気象予報によれば病害虫の発生に好適な条件が続くことから、防除が困難になることが懸念されます。そこで、ほ場での発生状況を再度確認し、早めの防除を行いましょう。

1 発生状況等

- (1) 今作において、トマトおよびナスすすかび病やコナジラミ類は平年よりも早くから発生が多くなり、一部で多発生しているほ場もみられる。
- (2) 11月の巡回調査におけるトマトすすかび病は、発病株率17.4%（平年3.0%）で平年比多の発生であった（図1）。また、ナスすすかび病は発病株率1.6%（平年0.1%）で平年比やや多の発生であった（図2）。
- (3) 11月の巡回調査におけるコナジラミ類の寄生株率は、トマトが0.3%（平年0.4%）で平年並、キュウリが11.0%（平年1.5%）で平年比多の発生であった（図3、図4）。
- (4) 福岡管区气象台が11月24日に発表した向こう1ヶ月の予報は、気温が平年より高く、降水量は平年並か多い予想である。

2 防除対策

今後は生育が進むにつれ葉の重なり等により薬剤の散布むらが生じやすくなる。さらに、向こう1ヶ月の気温は平年より高く、降水量も平年並か多い予想であり、病害虫の発生に好適な条件となる可能性が高いため、防除が困難になることが懸念される。

そこで、施設野菜での発生状況を確認し、以下の防除対策を行う。

(1) 共通

- 1) 整枝、誘引、摘葉等をこまめに行い、採光を良くする。
- 2) 薬剤散布の際は、散布むらが生じないように、十分量の薬液を丁寧にかける。なお、散布は薬剤が乾きやすい時間帯に行う。
- 3) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。
- 4) 農薬を使用する際は、安全使用に努める。また、ミツバチや魚介類など周辺動植物及び環境へ影響がないよう、飛散防止を徹底するとともに、事前に周辺の住民や養蜂業者等へ薬剤散布の連絡を行なうなど、危害防止に努める。

(2) 病害全般

- 1) 地面をマルチフィルムで全面被覆したり、うね間（通路）やうね上に敷わらを行い、施設内が過湿条件にならないように努める。
- 2) 天井ビニル等の結露水は、植物体にかからないように、谷下等へ排水する。
- 3) 温度管理に注意しながら換気に努める。さらに、暖房機等で施設内の空気を循環させ、植物体の周囲を過湿状態にしないようにする。
- 4) なり疲れや肥料切れによる草勢低下は病害の発生を助長するので、適正な肥培管

理に努める。

5) 発生してからでは防除が困難となるため、予防散布に重点を置く。

6) 発病葉等の発病部位は、伝染源となるので、直ちに除去しほ場で適正に処分する。

(3) 虫害全般

1) 多発生してからでは防除が困難となるため、色彩粘着トラップ等を施設内に設置し、早期発見に努める。発生が確認されたら早期に防除を行う。

2) 施設内の雑草は、重要な増殖源となるので除去する。

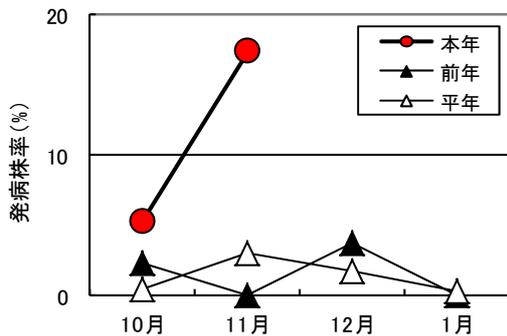


図1 トマトすすかび病の発病株率の推移

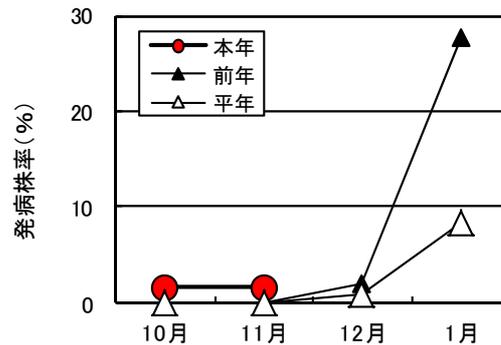


図2 ナスすすかび病の発病株率の推移

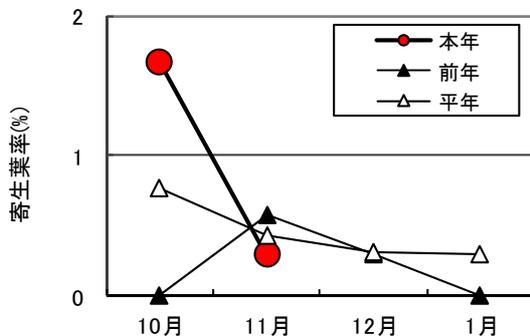


図3 トマトにおけるコナジラミ類寄生葉率の推移

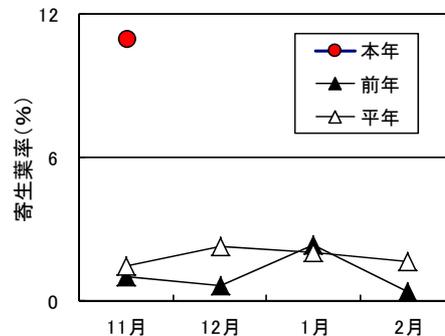


図4 キュウリにおけるコナジラミ類寄生葉率の推移

熊本県病害虫防除所

(熊本県農業研究センター 生産環境研究所
病害虫研究室 予察指導係)

担当：児玉 TEL 096-248-6490